Mon Nara

Numéro 289 Association Franco-Japonaise de Nara 奈良日仏協会 FEVRIER 2019 2 月号

2019 年度総会開催―年会費値下げを議決、創立 25 周年を迎え気持ちを新たに

2 月 3 日（日曜日）、ならまちセンター内「coto coto」（奈良市東寺林町）において、奈良日仏協会の 2019 年度総会が開催されました。出席者 23 名、委任状 47 名、合計 70 名で、会員総数 91 名の過半数を越え総会が成立したことを確認後、三野会長を議長に議事が進められ、次のとおり議案が承認されました。1）2018 年度活動報告、2）2018 年度決算報告、3）2018 年度会計監査報告、4）2019 年度役員選出、5）会則の改正、6）2019 年度活動計画、7）2019 年度予算。なかで特筆すべきことは、年会費の減額が議決されたことです。個人会員 5,000 円を 4,000 円に、学生会員 3,000 円を 2,000 円に変更することとし、会則を改正しました。

2018 年度活動においては、これまでのフランス・アラカルト、シネクラブ、教養講座に加え、新たに始まった美術クラブ、会話講座、特別行事として興福寺との共催によるギメ美術館出陳記念慶讃コンサートなどが報告されました。2018 年度決算は、収入 438,260 円、支出 441,833 円（25 周年積立金 50,000 円含む）、次年度繰越金額 1,375,037 円で、三木監事より、証憑がきちんと整理され正しく会計処理がされているとの報告がなされました。

役員選出では、井田理事が退任、浅井事務次長に代わり大内理事が新事務次長となることが承認され、2019 年度役員は、会長：三野博司、副会長：オリヴィエ・ジャメ、野島正興、事務局長：杉谷健治、事務次長：大内隆一、理事：浅井直子、南城守、藤村久美子、中辻純子、髙松洋子（会計）、喜多幸子、薗田章恵、監事：三木正義、顧問：坂本成彦の陣容となります。

新年度の計画として、最大の行事は、創立 25 周年記念行事の開催で、これを中心として引き続き文化活動、交流活動に積極的に傾注していくことが確認されました。広報関連では、会報誌「Mon Nara」を年 3 回、行事案内を中心とした「Mon Nara 通信」を年 3 回とすることが決まり、これに伴い、新年度予算が了承されました。2018 年度決算、2019 年度予算の詳細につきましては、別紙（折込）をご参照ください。

最後に、大内事務次長の就任、井田理事退任の挨拶の後、出席会員から自己紹介や近況報告をいただきました。（事務局）

≪ 三野会長 2019 年度あいさつ ≫

フランスで「黄色 jaune」といえば、連想するものは「ツール・ド・フランス」でした。初級フランス読本の教科書『ツール・ド・フランス』とやや易しい『プチ・ツール・ド・フランス』をつくったとき、全国の大学で広く採用されました。大学におけるフランス語履修者は、現在の何倍もいたのです。あれから状況はおおきく変化しました。そして昨年から、「黄色 jaune」が連想させるものも平和なスポーツから政治的闘争へと変わりました。

時代が変っても、文化交流の意義は不変です。本年は奈良日仏協会創立 25 周年を迎えます。2014 年、会長に就任し、当時の役員、理事の方々の強い支援を得て、20 周年記念事業を行うことができました。その後、理事のメンバーは半数以上が入れ替わりましたが、この新しく、そして変わらぬ強力な布陣で、セレモニーではなく「会員参加」「会員交流」を目指した 25 周年記念の催しを企画しております。ご支援をよろしくお願いいたします。

総会後の懇親会

懇親会は、三野会長の開会宣言に続いて、奈良日仏協会初代会長で日本酒「春鹿」会長の今西清悟氏による「フランス人の好きな酒とアメリカ人の好きな酒」と題したお話がありました。最近でこそ海外で日本酒がブームになっていますが、「春鹿」を海外で売り始めた 70 年代半ば頃にはたいへんなご苦労があったようで、その結果分かったアメリカ人とフランス人の気質、嗜好の違いを面白くご紹介いただきました。続いて喜多理事の所属する合唱団「Anima Mea（私の魂）」の選り抜きメンバー5 名が登場し、フランス・ルネサンスの世俗曲と日本の童謡合せて 5 曲をご披露くださり、混声四部編成のアカペラコーラスの豊かなハーモニーと軽快なリズムを一同心ゆくまで楽しみました。

喜多幸子さんと「アニマ・メア」の皆さん

ヴェロニック・ドニ=ラロックさん

ヴィクトリーヌ・アルノーさん

ピエール・レニエさん

濱惠介会員の音頭取りによる乾杯の後は、おいしいお料理とフランスワインをいただきながらの会員相互の懇談の場となり、途中、今西清悟さんから差し入れいただいたフランスボルドーの本格赤ワインとフランスに輸出している「封印酒春鹿」を試飲したり、フランス人ゲストの紹介の部では、奈良県国際交流員ヴェロニック・ドニ=ラロックさん、奈良教育大学交換留学生のヴィクトリーヌ・アルノーさん、奈良先端科学技術大学院大学のゲナエル・ラッペンさん、企業研修で英語を教えられているヴァランタン・デフォセさん、ガイドクラブ講師等を務められたピエール・レニエさんから日本語あるいはフランス語でご挨拶いただきました。新入会の今西絵美さん、再入会の村田京子さんからの自己紹介の後、最後に、南城理事ご提供の絹谷幸二天空美術館招待券 10 名分を賞品にじゃんけん勝ち抜き戦を行ない、「Anima Mea」メンバーと大西弘会員の指導により「花の街」を全員で合唱し、野島副会長のご挨拶で閉会しました。（杉谷）

懇親会参加者からの声

♦♦♦ワイングラスを片手に色んな分野で活躍されておられる多士済々の会員の方々や、奈良とその近郊にお住いのフランス人の方々とも親しくお話をさせて頂く事が出来、大変楽しいひと時でした。今西清悟初代会長の有意義なお話や混声アカペラコーラスも懇親会に彩を添えて頂いたと思います。日仏の友好親善が一層深まる事を願いつつ、少し短く感じられた懇親会場を後にしました。（大西 弘）

♦♦♦総会後の懇親会に久しぶりに参加させていただきました。しばらくご無沙汰していた方々にお目にかかれ、思わず手を取り合ったり、お互いの消息を語り合ったり、楽しいひと時はあっという間に過ぎました。
長く続けてきたフランス語の学習ですが、時にはモチベーションの維持に苦労するこの頃です。今後は日仏協会の皆様のお力をお借りして、フランスの文学や文化をゆっくり楽しもう！と思います。今後ともよろしくお願い致します。（森井 桂子）

♦♦♦久しぶりに総会・懇親会に参加させて頂きました。2 年振りに懐かしい皆様のお元気そうなお顔を拝見し大変嬉しく思いました。総会は三野会長のご挨拶に始まり 2018 年度の決算報告や今年度の活動報告などの報告発表があり堅実な運営をされている印象を改めて感じる事が出来ました。第 2 部の懇親会のお話しとして初代奈良日仏協会会長の今西清悟様をお迎えしての講話「フランス人の好きな酒とアメリカ人の好きな酒」もユーモアを交えながらの経験に基いた蘊蓄のあるお話しは時間を忘れ耳を傾けました。その後の混声アカペラコーラスも素晴らしく感動致しました。またフランス人 5 名の方々のスピーチもユーモアに溢れて心和み、会員の方それぞれが多士済々の方々で学ぶ事が多くいつも感謝と敬服しております。これからも出来る限り色々なイベントに参加し皆様と交流を深めて参りたいと考えております。（古森 淳一）

♦♦♦最近は懇親会に参加できなかったのですが、この度は参加させて頂きました。興味深かった事は、二つ。一つは、初代会長今西さんのお話しです。日本酒だけでなく、渡仏なさりワイン造りの勉強もなさったとの事。また何度も海外にまで足を運ばれ、試行錯誤の末に今があるとの事。良いものを作り上げようと、日々真摯に取り組まれてらっしゃる姿勢に、感銘を受けました。二つ目は理事の喜多さんを中心とする混成合唱団の皆様の演奏です。アカペラで温かな素晴らしいハーモニーを聴かせて下さり、癒されました。沢山の方々とお話もできて、楽しい良い一日になりました。（三澤 知香）

フランス人ゲストからのメッセージ

♦♦♦J'habite à Nara et je travaille à NAIST (Nara Institute of Science and Technology, kita Ikoma) depuis près de trois ans. Il y a quelques mois, à une exposition de peinture sur Versailles, j'ai rencontré le président de votre association franco-japonaise qui me l'a fait connaitre. Je suis impressionné par toutes les activités qui s'y tiennent (musique, cinéma, littérature...), mais je ne peux malheureusement pas encore y participer complètement du fait de mon très faible niveau en japonais. Par contre, pour ce banquet auquel j'ai amicalement été invité avec ma femme japonaise qui n'a malheureusement pas pu venir, pas de problème de langue : la musique et la cuisine ont un langage universel! Un très joli concert d'un chœur mixte constitué de deux hommes et trois femmes a interprété a cappella plusieurs chansons françaises et japonaises mettant en place une admirable ambiance propice à déguster des vins français délicieux de Bordeaux et de l'Hérault, puis un merveilleux sake de la région de Nara accompagné par une cuisine de qualité. Encore merci pour ce moment très chaleureux qui m'a permis de revoir les membres de votre association mais aussi de rencontrer plusieurs compatriotes, ce qui est une première pour moi à Nara.

私は奈良に住んでおり、奈良先端科学技術大学院大学に勤務して約 3 年になります。数ヶ月前、ヴェルサイユの絵画展で、奈良日仏協会の会長にお会いしました。協会のあらゆる活動（音楽、映画、文学など）に感銘を受けていますが、日本語力不足ですべてに参加することはできません。妻は残念ながら来られませんでしたが、二人で招待頂きましたこの懇親会には、言葉の問題はありません：音楽と料理は世界語ですから！男性 2 人女性 3 人による素晴らしいアカペラが、ボルドーとレロー産のおいしいフランスワイン、素晴らしい奈良の酒、吟味された料理を味わうのにふさわしい素晴らしい雰囲気を醸し出しました。この機会に、協会の会員のみなさまに会えただけでなく多くの同胞にも会うことができ、ありがとうございました。これは私にとって、奈良で初めてのことです。

（Gwénaël RAPENNE ゲナエル・ラッペン）

♦♦♦C’est sur invitation de M. Jamet que j’eus le plaisir de me rendre dans la magnifique ville de Nara afin de rencontrer les membres de l’Association Franco-Japonaise.
Le voyage depuis mon fief d’Awaji fut long mais il en valut la peine ! Pour moi qui continue de me dédier à la culture et la langue japonaise il est facile d’oublier l’attrait que peut susciter mon propre pays au Japon. Quel plaisir de découvrir un milieu si francophile et érudit au milieu de performances musicales et dégustations de bons vins !
Je n’ai qu’un regret : n’avoir pas eu assez de temps pour m’entretenir avec l’intégralité des membres. J’espère néanmoins remédier à cela en me rendant, toujours avec plaisir, à une prochaine réunion !

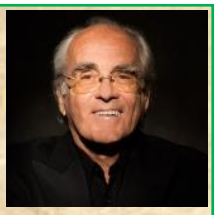
私が奈良日仏協会の会員のみなさまに会うために美しい奈良を訪れることができたのは、**Jamet** さんの招待でした。

私の根城のある淡路からは遠かったですが、それだけの価値がありました！日本文化と日本語に身を捧げているので、私の国が日本で生み出すことのできる魅力を忘れがちです。こんなにフランス好きで学識豊かな人々の場を、音楽演奏やワインを賞味しつつ発見するなんて、とてもうれしいことです。残念ながら、メンバー全員と話をする時間がありませんでした。 しかし、次の機会にも喜んで参加して、皆さまとお話をしたいと願っています！

（Valentin Defossez ヴァランタン・デフォセ）

特別寄稿

ミシェル・ルグラン追悼 Hommage à Michel Legrand



ミシェル・ルグランの人生はまるで音楽のつむじ風のようだ。作曲、編曲、演奏、ジャズ、バラエティショー、映画音楽…。同時にこれほど多くの専門領域において卓越した芸術家は珍しい。彼のキャリアはアンリ・サルヴァドール、ジジ・ジャンメール、モーリス・シュヴァリエの伴奏者・編曲者として始まる。そしてシャルル・アズナブール、フランク・シナトラ、サラ・ヴォーガン、エラ・フィッツジェラルド、ジェシー・ノーマン、キリ・テ・カナワ、ナナ・ムスクーリ、クロード・ヌガロ、ナタリー・デセイら、バラエティショー、ジャズ、クラシックの偉大な歌手たちとの仕事が続く。1954 年には、ジャズにアレンジしたシャンソンによる彼の初めてのアルバム『I love Paris』が大成功をおさめ、ジャズ界に反響を呼んだ国際的な活動の出発点となる。さらには、マイルス・デイビス、ジョン・コルトレーン、ビル・エヴァンスらのようによく知られた音楽家たちと仕事をすることになる。彼の曲のいくつかは、「リラのワルツ」「マクサンスの歌」など、ジャズのスタンダードナンバーにもなっている。1960 年代には第二の活動「映画」を始める。折しもヌーヴェル・ヴァーグが台頭していた。アニエス・ヴァルダ『5 時から 7 時までのクレオ』(1962)、ジャン=リュック・ゴダール『女は女である』(1961)『女と男のいる舗道』(1962)『はなればなれに』(1964) などの作品のために作曲する機会を得た。しかしフランス映画をもっとも際立たせたのは、なんといってもジャック・ドゥミ監督との共同であろう。『ロラ』(1961)『シェルブールの雨傘』(1964)『ロシュフォールの恋人たち』(1967)『ロバと王女』(1970) の作品は、フランス・ミュージカルというジャンルの誕生をもたらした。1966 年からは、ロサンゼルスに拠点を移しハリウッドに進出する。そして、映画『華麗なる賭け』(1968) の中の「風のささやき」、『おもいでの夏』(1971) の映画音楽、バーブラ・ストライサンド監督・脚本・主演の『愛のイエントル』(1983) の映画音楽で、3 度オスカーの栄誉に浴した。ミシェル・ルグランは 2019 年 1 月 26 日土曜日 86 歳で亡くなった。 （ピエール・シルヴェストリ）

2019年度の活動についてのお知らせ

1）年会費の一部改定

総会報告にも書きましたように、今年から年会費の個人会員5,000円を4,000円に、学生会員3,000円を2,000円に、それぞれ1,000円ずつ値下げをし、会員の皆さまのご負担を少しでも軽くするようにいたします（法人会員5,000円、家族会員1,000円については据え置き）。お知り合いの方への入会ご勧誘をよろしくお願いいたします。

2）奈良日仏協会主催フランス語講座開講

4月から二つの「フランス語講座」がスタートします。

フランス語会話講座

□開講日時：4～6月、9～11月の第4木曜日（4/25、5/23、6/27、9/26、10/24、11/28）の17：45～19：15
□参加費：全6回6,000円（一括払い）　□会場：生駒セイセイビル会議室（予定）
□申込先：sugitani@kcn.jp（杉谷）　ご興味のある方はぜひご連絡ください。
□講師オリヴィエ・ジャメ先生からのメッセージ：日常生活を素材に 6 つのテーマを考えています。（例えば、買い物・お店、レジャー・趣味、一日の生活の流れ、バカンス・旅行、夢・欲求―まともなものから奇想天外なものまで、食べ物・身体・健康）。1回の授業は次の3部で進めていきます。
①はじめに：白板を使って、みんなで話し、書き、テーマに関して必要な表現や文法に慣れるよう学びます。
②実行：習ったことを使い、みんなでテーマについて話し合います。喋りやすいように先生が会話を誘導します。
③反復：最後に反復練習をしますが、もし時間がなければ、次の回の初めに行います。

入門・初級フランス語講座

□開講予定日時：4/12、4/26、5/10、5/24、6/7、6/21　10：15～11：45
□参加費：全6回6,000円（一括払い）
□会場：生駒セイセイビル会議室（予定）
□申込先：受講希望者 3 名以上で開講いたしますので、ご本人または知人で関心のある方がおられましたら、tetsu11-kyo13@docomo.ne.jp （髙松）まで、ご連絡ください。
□講師各務奈緒子先生からのメッセージ：皆さんと楽しくフランス語を勉強していけたらと思います。読む、書く、話す、聞くのバランスの取れたフランス語を、世界文化遺産や食など、文化の紹介も交えて学んでいきます。
□使用予定テキスト：藤田裕二『パリ-ボルドー―フランスの世界遺産と食文化を巡る旅 1―』朝日出版社

3）ガイドクラブ：

2015 年のガイドクラブ再開以来、浄瑠璃寺（2015）、当麻寺（2016）、大神神社（2017）、吉野（2018）を訪れ、それぞれの土地の歴史・文化・建造物・仏像等についてフランス語訳をまじえながら知識を深めつつ、フランス人との交流や会員同士の懇親を楽しんでまいりました。2019年は秋に室生方面への散策を計画していますので、お楽しみに！

4）会報誌 発行回数の変更

昨年の広報誌につきましては、事業の報告、会員投稿読み物を掲載した「Mon Nara」を年4回、事業の告知中心の「Mon Nara 通信」を年2回発行しましたが、今年から、「Mon Nara」を年3回（2月、6月、10月）、「Mon Nara 通信」を年3回（4月、8月、12月）の発行に変更いたします。奈良日仏協会からのお知らせが会員の皆様に届く回数、タイミングは変わりません。

5）会員名簿の発行

2019年度の会員名簿を作成し、4月に「Mon Nara 通信」と一緒にお送りする予定です。記載事項に変更のある方は3 月 31 日までに、次の1）～3）いずれかの方法で変更内容をお届けください。1）MAIL：sugitani@kcn.jp
2）FAX：0742-62-1741　3）郵送：〒630-0224 生駒市萩の台3丁目2-13 杉谷方 奈良日仏協会事務局。
お名前以外の掲載事項は自由に選択することができますので、掲載項目を変更したい方はその旨ご連絡お願いいたします。

モリエールの喜劇 〈1〉

山本 邦彦

『才女気取り』（*Les Précieuses ridicules*, 1659）

モリエールの肖像 ピエール・ミニャール画
シャンティイ城コンデ美術館所蔵

モリエールはフランスを代表する、いや世界を代表すると言ってよい喜劇作家です。今回の連載は、彼の主要作品を12回（あくまで予定）に亘って、写真付きで簡単に紹介するという企画です。そこで本題に入る前に、彼がいかにして喜劇作家となったか、その前半生についてざっと触れておきます。

モリエールは1622年、ルーブル宮にほど近いパリのど真ん中で、室内装飾業を営む裕福な商家の長男として生まれました。中等教育を終えたあと、さらにオルレアン大学で法学士の資格まで取っています。本来ならこのあたりでとうぜん親の稼業を継いでいてよいところですが、このころすでにマドレーヌ・ベジャールという女優といい仲になっていました。彼より4歳年上です。モリエールがどこで彼女と出会ったのか、まったくわかっていませんが、私は、彼がパリのどこかの舞台で彼女に惚れ込み、その後ぐうぜんオルレアンでそのあこがれの女優に再会したのではないかと、勝手に想像しています。

1643年、モリエールはパリでマドレーヌ・ベジャールおよびそのきょうだいと組んで「盛名劇団」を旗揚げします。しかし、その大層な劇団名とは裏腹に、たちまち破産に追い込まれ、逃げるようにして長期の旅興行に出ます。モリエール23歳の時でした。それからまさに苦節13年、一座を率いてフランス各地、とくに南部地方を回ります。この間の様子はムヌーシュキン監督が映画『モリエール』（1978）の中で豊かな想像力を駆使しておもしろく描いています。そして1658年、36歳でようやくパリに戻ってきたモリエールは、運良く国王ルイ14世の寵を得て、最初はプチ・ブルボンを、ついで宰相リシュリューの旧邸にあった劇場パレ・ロワイヤルを貸与されます。以後彼はまるでものに憑かれたように喜劇を書きまくります。その最初の作品が散文1幕劇の『才女気取り』です。

パリに出てきたばかりの田舎娘でいとこ同士のマドロンとカトスのもとに、ふたりの青年貴族ラ・グランジュとデュ・クロワジーが求愛の訪問をし、あっさり追い返されてしまいます。小説風の手の込んだ恋愛の手順を踏まなかったからです。立腹した青年ふたりは、貴族の真似をしたがる下男のマスカリーユとジョドレを侯爵子爵に仕立てて、娘たちのもとへ送り込みます。すると、案の定、彼女たちはその肩書きはもとより、派手な衣装や文学趣味や武勇談に幻惑されて、舞い上がります。そこに青年ふたりが現れて、にせ貴族をたたき出し、娘たちに赤恥をかかせます。

1630年頃からパリの上流社交界では、それまでの粗野な気風を正し、言語を浄化し、上品な趣味を育もうとする風潮が生まれました。これがプレシオジテで、それを実行しようとした女性たちがプレシューズと呼ばれました。しかしこの流れはやがて貴族の猿まねとして町人たちの間にも広がり、嘲笑の的となってゆきます。『才女気取り』は、笑劇的な軽さを残しながらも、嫌みな気取りというような、まさしくその時代の風俗を風刺するという点で、モリエールのその後の方向を決定づけた重要な作品です。

コメディ・フランセーズ

ことのついでに、エドモン・ロスタンの『シラノ・ド・ベルジュラック』に登場するロクサーヌがまさしくプレシューズであったことを、付け加えておきましょう。

（注）この連載では、モリエールの作品名および引用は、原則として鈴木力衛訳（「モリエール全集」中央公論社）を用います。

「フランス鉄道紀行」（3）《都会のそばの中世の村 ペルージュ》

知念 宏司

ペルージュの街並み

大都市リヨンから列車で 30 分ほどのところに、「フランスで最も美しい村」の一つに認定されているペルージュ(Pérouges)がある。ここへ行くには、Lyon Part-Dieu 駅から Ambérieu-en-Bugey 行きの普通列車に乗り、Meximieux-Pérouges 駅で下車する。ここはリヨンとジュネーブを結ぶ幹線上にあり、比較的列車の本数も多い線区だ。きわめて運がよければ「オリエント急行」（現在は観光列車）の通過を見ることもできる。

駅のあるのが Meximieux で、ここは結構賑やかな町だ。ペルージュはその北西にある「隣村」だ。駅から歩くとやや遠いが、村の東端につながる近道（途中に標識がある）を見つけられれば 30 分程度で到着できる。「フランスで最も美しい村」に認定されている場所は自動車でないと行けないような秘境にあるのが通例で、30 分歩くとはいえ、鉄道と徒歩でアクセス可能な場所は貴重だ。

Meximieux-Pérouges 駅を通過する オリエント急行。 予期せぬ出会いに 思わずシャッターを切った。

村に入ると、都会の喧騒とは無縁の中世の街並みが待っている。観光シーズンならごった返しているだろうが、筆者が訪れたのは 3 月、人っ子一人いない、とまではいかないものの、おとぎ話に出てきそうな家々がひっそりと佇む様には心が洗われる思いだった。

村は小さいので、リヨンに宿泊して日帰りでの観光も十分可能だ。村内の道路はどこも小さな石が敷き詰められていて少々歩きにくく、スーツケースを携えての観光は厳しい。その意味でもリヨンからの日帰りは賢明かも知れない。見どころは何と言っても街並みそのものだが、教会、紙漉き工房、土産物屋、数軒のレストランがあるほか、名物菓子 Galettes de Pérouges を売る店もある。中世から続くという小さな教会はまさにアルス・アンティクヴの古い音楽が似合いそうだ。 教会そばの建物の一角が実は学校で（田舎の小学校！）、昼休みに数人の子供たちが出てきた。突然目の前に現れた東洋人にいささか驚いた様子だったが、覚えたての英語で話しかけてきたのが微笑ましい。フランス人の気質も徐々に変化していくのであろう。

「徒然フランス音楽メモ」（5）《六人組》

大内 隆一

室内楽仲間 Nahn Tschatte Chamber Ensemble のミニコンサートでダリウス・ミヨーの「ピアノ、ヴァイオリン、クラリネットのための組曲」を演奏したとき、聴きに来た友人「ミヨーは面白かったね、ブラジルの人だった？」。ヴィヴァルディやベートーヴェンと並ぶと、エスニックで躍動する音楽が際立ちましたが、1892 年エクス＝アン＝プロヴァンス生まれのフランス人。「スカラムーシュ」はポピュラーでもっとブラジル的です。外交官でもあったポール・クローデルがブラジルに赴任するとき、ミヨーを秘書官として伴ったのでした。友人の音感は鋭かったわけです。（なお、アンサンブル名はドイツ語などではなく「なーんちゃって」と読みます）

コクトーがプロデュースした「フランス六人組」（AKB48 の先取り）のひとりで、あとの 5 人は、デュレ、オネゲル、タイユフェール、プーランク、オーリック。タイユフェールは繊細・優美な作品で「耳のマリー・ローランサン」と称され、映画音楽もたくさん作曲しています。YouTube で彼らの作品を聴いてみると、様々な意匠工夫が凝らされた世界がつぎつぎ現れてきて、空想植物園か迷宮を冒険するような気になります。共通した特徴は、異文化（異国だけでなく、古代中世という異文化も）に開かれた自由な想像力、聖と俗の混交、形式や技術や語彙を固定してしまわないこと、いわゆる「大家」ではないことにあるように思えます。

プーランク（左）とコクトー

フランシス・プーランク(1899-1963) はパリっ子で悪童。「ガキ大将と聖職者が同居している」などと評され、ピアノ曲、室内楽からオペラまで魅力満載の 200 曲もの作品があります。特に高く評価されているのが声楽曲でアポリネール、エリュアール、コクトー、アラゴンら天才たちと作品を創造している。そして、プーランクよお前もか、カミングアウト。彼の初恋はパリの路上で転んでぶつかった相手の男性だったらしい。六人組の後はメシアンとかブーレーズとか、大気圏の先へも飛び出ます。そのギリギリ手前の閾に来ていた六人は、二十世紀に爆発的に開花する色とりどりの音楽に向かって、ビートルズがアビイロードを渡る半世紀前に、足を踏み出していたのです。

《クープラン》から《プーランク》まで、一年間よしなし事を書かせていただきました。ますますフランス音楽の魅力に取り憑かれてしまいました。

特別寄稿

ラテン文化とアングロサクソン文化

今西 清悟（当協会初代会長・春鹿醸造元今西清兵衛商店会長）

歴史と伝統に培われたヨーロッパ諸国の文化レベルは総じて高い。その中でもフランスは、図抜けてハイレベルである。音楽、絵画、映像、彫刻、演劇、詩、文学など、枚挙にいとまがないほど各文化分野において、世界の先駆的な位置にいる。さらには、原子力技術をはじめ科学、化学、薬学、医療技術も同様である。他方、あまり知られていないが、フランスは世界一偉大な農業国であり、食糧自給率が 160 パーセントである（参考：イタリア 134%、アメリカ 125%、中国 108%、英国 104%）。それに対して日本は、33 パーセントと先進国の中でロシアとともに、自給力が不足している国である。

フランスはラテン民族国家のリーダーとして、豊かな自給力をベースに、調理技術の粋を尽くしてフランス料理を確立した。さらには旨さの引き立て役として、葡萄を selection florale と呼ばれている品種改良技術を駆使して、多様な香味をもつ果実を作り、ワインを醸造して、食文化を育んできた。赤ワイン用には、ピノ・ノワール、カベルネ・ソーヴィニョン、メルロー、グルナッシュ、ガメイ。白ワイン用には、フォールブランシュ、ユニブラン、シャルドネ、ソーヴィニョン・ブラン、ピノグリ等の葡萄の品種が多く使われている。イタリアも同様に、イタリア料理やワインを育んできた。赤ワイン用には、ネッピオーロ、ヴァルバドス、バローロ、白ワイン用にはコルテーゼ、モスカートビアンコ等が主に使用されている。

フランス人やイタリア人は、野菜、魚、貝、甲殻類で新鮮さを、牛肉は氷温熟成したものを調理し、食事は楽しい話をしながらゆっくりとスローフードを楽しんでいる。またフランス人は幼少時から、ワインを水やミルクに混ぜてアルコール度を薄めて飲ませ、ワインに対する味覚を養っている。味には、甘、酸、塩辛、苦、渋の五味があるが、甘味は「安全」、酸味は「少し変」、塩辛は「刺激が強い」、苦味・渋味は「たまらない」と、幼児は感じるよう DNA に刷り込まれていると云われている。成長に伴って、四つの味が徐々に受け入れられるそうだ。

そのように香りや味覚に鋭敏なフランス人が造る白ワインに対抗するために、弊社も酒造りの努力をしている。大粒の酒米を 35 パーセント重量になるまで高度精白し、2 週間冷温貯蔵し、吸水過剰にならないように秒単位で素早く手洗いをして、水切りを充分行い、高温高圧の乾燥蒸気で一気に蒸し上げ、通常 15 度 C で発酵させるのを、9.5 度 C の冷温長期発酵を行って、吟醸造りをしている。またフランスには、使用麹や酵母も特別に芳香を放つ菌株を開発して造り上げた酒を出荷しているので、人気は上々である。この品質を保持する限り、フランスにおける日本酒の将来は明るい。

フランス人は自国の文化を誇りとしながら、他国の文化をも大切にして理解して受け入れ、優れたものには賞賛を惜しまない国民である。一方、アングロサクソンの英国や米国には商用で何度も訪れたが、美味な食事をしたことは一度もない。ロンドンのトラファルガー広場の前の一流ホテルのディナーと朝食の不味さに吃驚したが、宿泊客の誰ひとりとしてクレームを云う人はなかった。考えてみれば、トランプゲームに夢中で主食と副食を挟んで食べたというサンドウィッチ伯爵の逸話で知られ、ハンバーガーやホットドッグがよく食べられる国には、食の文化は育たないのかもしれない。極論の謗りを受けるかもしれないが、空腹を満たすために食べているのかなとさえ思う。それでは味覚は養えない。酒の味についても、ライト、スイート、マイルドを判断基準としている人が多い。とはいえ、キリスト教の国であるなら、旧約聖書の中に「すべての業には時がある」という言葉もあるので、速い安直なファーストフード重視を脱して、英国料理、米国料理と称されるような美味な食を創り上げてくれることを切望している。

会員投稿

フランスかぶれの失敗談

西野　正人（にしの まさと）

私は 1987 年～1989 年の約 2 年間、Paris の INSERM（Institut National de la Santé et de la Recherche Médicale）U143 で政府給費研究員として働きました。以来ずっと妻と共に Francophile です。以下、自戒を込めての苦い経験を紹介します。

<フランス語の発音は難しい>　フランス生活もほぼ2年となったころ、職場スタッフとのコミュニケーションや日常生活の会話も私の下手なフランス語で不自由さを感じることもなく、フランス以外の国々への旅行から帰仏してパリの空港を上空から眺めると、まるで自国に帰ったような安堵感を感じるようになりました。そんな時、レストランで（いつもはコーヒーですが）めずらしくレモン紅茶を頼んだ時、thé au citron、s'il vous plaît が通じない、きっとシトロンの発音が悪い？のだろうと思ったのだが、・・、フランス語への自信がガラガラと崩れるのを感じました。後で研究所の同僚のフランス人に thé au citron が通じなかったことを話したら、私の発音した thé au citron がわからないという、何度が説明してやっと「ああ citron のことか」と言って発音を教えてくれたが、今もその発音がよくわからない・・・・・

＜ワイン＞　週に 1-2 回程度、Guide de Poche du Vin を片手に、病院からの帰りに遠回りして Nicolas に立ち寄り、亭主の薀蓄を聞きワインを買って帰りました。とくに Gevrey-Chambertin が好きでしたが、いろいろのワインを試しました。そのうち研究所でも私がワイン通であるかのように噂されるようになり、ひそかに自信を持ってしまいました。ところが帰国後に国際学会のレセプションで出されたワインが日本の地方ワインと区別できず・・、ワインに対する自信がガラガラと崩れ去りました。以降、ワインの薀蓄はやめ、今は安ワインを細々と楽しんでいます。

Guide de Poche du Vin

私は＜フランス語クラブ＞から＜奈良日仏＞へと発展してゆくときに、何年か参加させていただきましたが、その後は長い間ズボラをしていました。定年退職を機にまた妻と共に参加させていただき、ゆっくり勉強したく考えておりますのでよろしくお願いいたします。

関西日仏学館《Institut franco-japonais du Kansai》の思い出

森 裕子（もり ひろこ）

もの心つく頃から二十歳頃まで、京都大学の正門の近くに住んでいました。通学時や出かけるとき、かの建物を横目で見ながらというか、それが視界に入るのです。そこだけ外国の街の一角のような。壁に、ちょっと珍しい字体で何か書いてあるのですが、私には読めなくて、謎の建物でした。高校時代、友人のお兄さんがそこでフランス語を習っていて、小学生も習いに来ているという話を聞き、漠然と「フランス語を教えるところなんだ」と思ったものの、全く興味がありませんでした。それが、大学時代の就職活動も忙しくなる頃、にわかにフランス語講座に通い始めることになりました。

フランス語は全く初めてで、驚きと緊張の連続でしたが、先生方がとても熱心で、楽しく通うことができました。生徒は大学生が多かったですが、フランスで仕事をする予定のある社会人もいました。講師の中には私たちと同年代の方もおられ、当時の兵役義務を免除され、その代わりに外国でフランス語を教えに来ているのでした。若い先生とは授業が終わると、近くのレストラン円居で、わいわいと夕食を共にするのも楽しみでした。パリ祭の夜には、小さな噴水のある庭で花火をしたり、フランス産のワインがどこからともなく回ってきて、乾杯したりしました。

1階には事務所、教室、稲畑ホール、2階には教室、図書室、視聴覚教室があり、上級クラスになると2階の奥の教室になります。その教室にだけ、壁に大きな絵画が掛けられていて、ちょっと格別な雰囲気がありました。花盛りの樹が一本あり（林檎でしょうか？）傍らに若い女性たちが寛いでいる田園風景ですが、藤田嗣治画伯による「ノルマンディの春」という作品です。

ここはクラシック音楽の振興にも力を入れていたようで、毎年クラシックの短期講座のようなものやマスタークラスが行われていたようです。私は行ったことがないので、おそらく音楽を専攻している人が申し込んで、参加できるようになっていたのかも知れません。3階は、現在では在京都フランス総領事館 となっていますが、当時は館長の公舎になっていました。ある日、アンドレ・マルロー氏が私的に当時の館長を訪ねてこられ、生徒たちに取り囲まれる、というちょっとした事件がありました。彼が文化相を退いて、そんなにたっていない頃です。残念ながら、私が帰ってしまった後のことでしたが。何故か、それから程なくして、館長は文化省に栄転し、パリへ帰っていきました。それから私は、大阪へ引っ越し、仕事が忙しくなって、3年も勉強できなかったのが残念ですが、今もフランス語の音声を聴くと、懐かしいのです。

パリ留学の思い出

角田 茂（つのだ しげる）

印象派の画家、モネの絵で有名なサン・ラザール駅はパリの北部にある。ノルマンディー地方など、北へ向かう列車のターミナル駅で、上野駅のモデルとなった。サン・ラザール駅からヴェルサイユ行きの近郊電車（山手線のような）に乗って約15分すると、スューレーヌ・モン・ヴァレリアン駅に着く。私が 35 年前に留学していたフォッシュ病院（パリ第5大学附属）は、この駅前、モン・ヴァレリアンの丘の中腹にある。5階（日本式では6階）脳神経外科病棟からの眺めは最高で、ブローニュの森越しに、エッフェル塔を始め、パリの街が全貌できる。この病院の外科系は有名で、フランスで初めて心臓移植を行った Daniel Guilmet 教授、頭蓋顎顔面外科の創始者である Paul Tessier 教授、 頭蓋底外科の創始者である Patrick Derome 教授など、蒼々たるメンバーがそろっていた。経蝶形骨洞手術の創始者である Gérard Guiot 教授は定年退職して、脳神経外科部長は Derome 教授に代わっていた。院内のカフェーで Guiot 名誉教授にお会いした時、「今、娘のためにオペラを作曲している」と言われたことを今でも憶えている。彼はプロ級のオルガニストで、自宅に大きなパイプオルガンがあると Derome 教授から後で聞いた。

実用的写真技術は 1839 年、フランス人のダゲールによって開発され、「ダゲレオタイプ」と呼ばれた。写真家ナダールは 1854 年、サン・ラザール駅の近くに写真館を建て、有名人の肖像写真を撮り始めた。1860 年には、仕事場が狭くなり、彼は写真館をキャプスィーヌ通りに移転させた。ここでシャルル・ボードレール、フランツ・リスト、ジョルジュ・サンドなど、多くの有名人が肖像写真を撮影している。医療現場に写真を初めて導入したのは、神経学の父、Jean-Martin Charcot と言われている。その弟子、Pierre Marie が 1886 年に発表した末端肥大症（acromégalie：自身の命名）の写真は有名である。写真が普及してくると、写実的な絵画はその意義を失い、画家たちは新たな路線を歩み始めた。肖像画ではその人の内面を、風景画では瞬間的な動きを色彩豊かに表現するようになり、そこで印象派の絵画が誕生した。写真家ナダールは彼らを援助して、1874 年、第1回印象派展を彼の写真館の2階で開催している。写真家ナダールは印象派絵画誕生の功労者である。

私にとって、留学中、最大の思い出は、1983 年秋、スタニスラフ・ブーニンがロン=ティボー国際コンクールで優勝し、コンクール入賞者によるガラ・コンサートをパリで聴くことができたことである。日本人のほとんどは、2年後のショパン・コンクール優勝で彼を知り、その後日本でブーニン・フィーバーが起きている。

フランスとの出会い

今西 絵美（いまにし えみ）

私とフランスとの出会いは、第 2 外国語として学んだことが始まりです。フランス人の先生とフランスがとても好きな日本人の女性の先生でした。授業の内容は、ほとんど覚えていませんが、とても印象的な出来事があります。女性の先生が、フランスでの仕事のため 2 週間ほど講義をお休みされました。久々に会う先生は、（もともと綺麗な先生でしたが）とても顔がシャープになり、綺麗になっていました。先生いわく、「フランス語の発音は日本語では使わない筋肉を使うから小顔効果があるのよ！」と。なんてステキな言語なんだろうと、ますます授業が楽しくなりました。フランスとの運命の出会いはこのように始まり、その後、うまく事が進み、リヨン第 3 大学への交換留学が決まります。

大学が始まる前に、3 週間程、ヴィシーという太陽が似合う街でホームステイをしました。ステイ先のマダムは、中国や、日本からの留学生を何人も受け入れている料理上手な方です。フランスらしく、美味しい手料理を時間をかけていただきました。ムタード、ビネガー、オイルを混ぜたドレッシングで和えたサラダ、前菜、メイン、フルーツなどのデザートにワイン。「フランスらしさを味わってもらいたいの」と、毎晩腕をふるってくれました。（ワインの説明もしてくれましたが、今ほど興味がなかったので覚えてないのが残念です。若者が好むもの、マダムが好きなものを、色々教えてくれました）。その後、リヨンでの一人暮らしに大学の授業は大変でしたが、周りに助けられ、刺激を受けながら過ごしました。今から思えば、日本でも、ホームステイでも、フランスを好きになる伏線しかなかったように思います。

帰国後、フランスに関わりたいと思いながらあっと言う間に時間がたってしまいました。最近、「働き方改革」と言われています。私の解釈では、早く帰って仕事以外の事で自分の能力を伸ばす。結果、仕事にも活かすことで、生産性を高める。という事だと考えています。仕事以外でしたいことをじっくり考えてみたら、やっぱりフランスに関することだな、と思いました。10 年以上離れてしまっていましたが、最近フランス語を学び直し始めました。目下の目標は、2 年以内に家族をモンサンミッシェルに連れて行くことです。

奈良日仏協会　会員主催の各種講座案内　（2019 年 2 月）

曜	時 間 帯	場 所	講 師	内 容、教科書	問合わせ先
月	9:45～11:45	生駒市コミュニティセンター 2 階会議室	三野博司	「学び直しのフランス語」　もう一度しっかり学びたい人向けです。ことばの仕組みや表現を学び、フランス文化の奥深い魅力を探ります。	mino.hiroshi @gmail.com（三野）
火	12:30～14:00	奈良フランスクラブ 〒630-8421 奈良市藤原町 1028-35	オリヴィエ・ジャメ	Conversation, expression, écrit et écoute Echo 1 (CLE International) A la page 2016 (Edition Asahi)	Clubfrancenara @kcn.jp 0742-62-2770（ジャメ）
火	19:00～20:30	同上	オリヴィエ・ジャメ	**仏検の準備専門的講座** 毎回、仏検 3 級と準 2 級の準備するため様々な練習 テキスト　駿河台出版社	同上
水	10:00～11:30	同上	オリヴィエ・ジャメ	フランス語 Communication 入門 テキスト Nouveau Spirale スピラル(Hachette)	同上
水	12:30～14:00	同上	オリヴィエ・ジャメ	**仏検の準備専門的講座** Echo B1 (CLE International)	同上
木	12:30～14:00	同上	オリヴィエ・ジャメ	Echo 2 (CLE International) Préparation DAPF-DELF	同上
木	19:00～20:30	同上	オリヴィエ・ジャメ	Echo 1 (CLE International) 毎回仏検 3 級、準 2 級の準備、DELF A1, A2	同上
金	10:50～12:50	同上	オリヴィエ・ジャメ	Echo 2 (CLE International) Bande dessinée : Tintin Objectif Lune	同上
土	毎月 2 回 13:30～15:30	同上	オリヴィエ・ジャメ	Interprétation-Traduction	同上
日	毎月 2 回 10:30～12:30 (2/10, 3/10, 24...)	同上	オリヴィエ・ジャメ	会話、作文、ヒアリング、聞き取り、書き取り、仏検読書/ DELF/DALF "	Clubfrancenara @kcn.jp 0742-62-2770（ジャメ）
日	偶数月第2日曜 14:00～16:30	同上	オリヴィエ・ジャメ	Mélodies de Claude Debussy 「ドビュッシー歌曲」	同上 chemin-de-fer1435mistral@docomo.ne.jp（水谷）
日	毎月 1 回 13:30～15:30 (2/24, 3/24 …)	同上	オリヴィエ・ジャメ	Séance de lecture et de discussion : Articles de L'Obs (*Nouvel-Observateur*)	Clubfrancenara @kcn.jp 0742-62-2770（ジャメ）
火	毎月 1 回 14:30～17:00 (3/5, 3/12)	生駒市コミュニティセンター 2 階会議室	浅井直子	プルースト講読会：『失われた時を求めて』から抜粋した仏語テクストを精読します。3 月 12 日は「パドヴァのジョットの礼拝堂」に関わる断章を読みます。	Nasai206@gmail.com 0743-74-0371（浅井）
火	毎月 1 回 14:30～17:00 (3/5)	生駒市コミュニティセンター 2 階会議室	浅井直子	プルースト読書会：岩波文庫版『失われた時を求めて』を読み進めています。3 月 5 日はプルーストが好んでいたオペレッタ作品を映像で鑑賞します。	同上
火	毎月第 2 火曜日 13:30～15:00	京橋 studio-J	梨里香	フランス語で歌うシャンソン	studioj-nktj @occn.zaq.ne.jp 06-6922-6502（中辻）
木	毎月第 1・3 木曜 14:30～16:00	京橋 studio-J	中辻純子	やさしいレクチュール　中級以上の方対象 簡単な短編やニュースを講読します。	同上
火	毎月第 2・4 火曜 10:30～12:00	京橋 studio-J	中辻純子	やさしいフランス語①　日常会話からフランス語の基礎と文法を学びます。	同上
水木土	毎月第 2・3・4 水木土 10:30～12:30	エコール・タンタン（奈良市西登美ヶ丘）	柳谷安以子	フランス各地の地方菓子を月替わりで2品作ります（第 4 週）。地方料理コース、パリのお家ごはんコース（第 2･3 週）もございます。	aiko.tantan@ezweb.ne.jp 0120-44-0341（柳谷）

2019 年度の講座紹介

「仏検の準備専門的講座」（奈良市藤原町「奈良フランスクラブ」にて）

☆毎週火曜日 19:00～20:30 主に文法を学びながら発音の練習をしています。テキストに沿い順にすすんでいきますが、関連する場合、ニュアンスの違いを学び理解を深めていきます（復習や予習にもなります）。年齢も職業も違いますが、「フランス語を学びたい！」という共通点があるため和気あいあいとした雰囲気です。そのため、質問もしやすく意欲的に学んでいます。毎回、仏検 3 級と準 2 級の準備するために、様々な練習テキスト（駿河台出版社）を使用しています。（今西絵美）

☆毎週水曜 12:30～14:00 毎回仏検 2 級と準 1 級の準備するため様々な練習をします。
テキストは Echo B1 (CLE International)。

「ドビュッシー歌曲」（偶数月第 2 日曜 14:00～16:30　奈良市藤原町「奈良フランスクラブ」にて）

フランス歌曲研究会の創立者である古澤淑子女史編集による全音楽譜出版社のドビュッシー歌曲集 1 巻・2 巻を順に勉強しています。フランス語のみならず多方面に精通しておられるオリヴィエ・ジャメ講師の指導は厳格ながらも楽しく、気軽に学べるクラスです。講師の発音に続いて単語を一語ずつはっきり発音する事によって、“ことば”に内在する意味と力を表出します。その作業を経てひとつの句へ、さらにフレーズへと進みます。クラスでありながら、個別に発音指導を受ける事ができる好機でもあります。お誘いあわせのうえ是非お越しください。フランス歌曲への興味も増すことでしょう。（水谷雅男）

「学び直しのフランス語」（毎週月曜 9:45～11:45　生駒市セイセイビル 2 階会議室にて）

そのむかしに習ったフランス語の感動をもう一度味わいたい。長年フランス語を学んでいるけれど、いまひとつ文法がよくわからない。ちょっとした会話、フランス文化、文学など、フランスに関することを少しずつかじりたい。そんな人向けの講座です。三つの柱を立てています。①フランス語文法参考書の超ロングセラー『新リュミエール』（森本英夫・三野博司共著）やネット教材を使って文法の復習。② パリの若者たちを描くフランス語教材 « Reflets » を使ってフランス会話表現練習。③ジャック・ドゥミ監督のフランス映画『ロバと王女』（Peau d'Âne）を見ながら、楽しくフランス語を学習。

「プルースト読書会」（第 2 火曜 14:30～17:00　生駒市セイセイビル 2 階会議室にて）

2010 年 11 月から刊行が始まった吉川一義訳による岩波文庫版『失われた時を求めて』は、最終篇の前半部『見出された時 I 』が 2018 年 12 月に刊行され、いよいよ 2019 年に最終巻『見出された時 II 』が刊行される予定です。この読書会が始まって今年で 4 年目となりますが、これまで参加者の皆さんの多彩な読解を通じてたくさんの発見や再認識がありました。いよいよ大詰めを迎えていますが、今年度からの参加も歓迎です。岩波文庫『失われた時を求めて』全 14 巻を読破した暁には、読者は以前とは別の人間になっていることでしょう。
☆教材：岩波文庫『失われた時を求めて』（吉川一義訳）各自購入、毎回資料配布。

第 1 回 7 月 9 日 ：『見出された時 I（1）』	第 5 回 12 月 10 日：『見出された時 II（2）』
第 2 回 9 月 10 日：『見出された時 I（2）』	第 6 回 1 月 14 日：参加者による意見交換・討論会
第 3 回 10 月 8 日：『見出された時 I（3）』	第 7 回 2 月 18 日：映像鑑賞
第 4 回 11 月 12 日：『見出された時 II（1）』	

「プルースト講読会」（第 4 火曜 14:30～17:00　生駒市セイセイビル 2 階会議室にて）

フランス語の原文で *À la Recherche du temps perdu* からの抜粋を読みます。2019 年度は最終篇 Le temps retrouvé の前半部分から、小説全体の本質的なテーマに関わる文章を採りあげ、プルースト文学の核心に迫ります。

第 1 回 7 月 23 日：ゴンクールの日記を読んだ「私」の感想	第 5 回 12 月 24 日：文体とはテクニックではなくヴィジョンの問題
第 2 回 9 月 24 日：ジルベルトからの再度の手紙	第 6 回 1 月 28 日：読者は本を読んでいるときには自分自身の読者
第 3 回 10 月 22 日：ゲルマント邸の中庭の不揃いの敷石	第 7 回 2 月 18 日：映像鑑賞
第 4 回 11 月 26 日：ふたつの対象を美しい文体の必然的連関に閉じ込めること	

「知って味わうフランス地方菓子」（第 2・3・4 水木土 10:30～12:30　奈良市西登美ヶ丘「エコール・タンタン」にて）

洋菓子店で並ぶことの少ないフランス地方菓子はシンプルですが、素材の美味しさと温かさが伝わります。毎回 2 種類のお菓子を素材の説明・歴史・風土などもご紹介しながら少人数で進めます。レッスンの後はお菓子を囲んでティータイム。ご自身で作ったその月のケーキやタルト（一人一台）はお持ち帰りいただきます。

奈良日仏協会創立 25 周年記念 フランスの音楽と文化祭 参加へのお願い

奈良日仏協会は創立 25 周年を祝して、会員によるフランスの音楽演奏に加えて、文学や美術などにも親しむ文化祭を催し、たんなるセレモニーを超えて、「会員参加」「会員交流」の場として、25 周年以降のさらなる発展の礎にしたいと思います。

開催日：**6 月 22 日(土)**　　会場：**生駒市セイセイビル 1 階文化ホール**

現在、会員による音楽演奏やお話をまじえたプログラムを企画中です。詳しくは追ってお知らせする予定です。会員同士の懇親を深め、新たな出会いの場となるような行事にできればと考えております。できるだけたくさんの会員の皆様の参加を楽しみにしております。

第 50 回奈良日仏協会シネクラブ例会（2/24）の案内

★2019 年 2 月 24 日（日）13:30～17:00　★ 奈良市西部公民館 5 階第 4 講座室
★ プログラム：**『ルージュの手紙』**（*Sage femme*、2017 年、117 分）
★ 監督：マルタン・プロヴォ Martin Provost　★ 参加費：会員無料、一般 300 円
★ 飲み会：例会終了後「味楽座」にて　★ 問合わせ：Nasai206@gmail.com（予約不要）
★フランス語の原題 ≪Sage femme≫ が示す通り、助産婦として働く主人公クレール(カトリーヌ・フロ)は、消息不明だった義母ベアトリス(カトリーヌ・ドヌーヴ)と 30 年ぶりに再会します。対照的な二人の女性の性格や生き方が、物語が進むにつれて、少しずつ浮き彫りになってきます。※詳細は、「奈良日仏協会」の HP をご覧になってください。（浅井）

「奈良」を紹介するフランス語ガイド

1）**『奈の良』NanoRa**：奈良県の国際交流員が、外国人の視点から見た奈良県の魅力ある場所や文化・行事を取材して紹介している情報誌です。日本語版、英語版、中国語版、韓国語版、フランス語版の 5 ヶ国語が揃っています。誌名は「奈良の良いところ」を意味し、奈良県の魅力を知ってもらうきっかけや助けになればとの願いが込められています。これまで第 1 号（2014 年 3 月）～第 10 号（2018 年 9 月）が発行され、「曽爾村、御杖村」「大和郡山市」「天川村」「生駒市」「明日香村」「葛城市」「吉野町」「宇陀市」「五條市」「奈良市」が紹介されています。「奈良県」の公式 HP にそれらすべての PDF ファイルが掲載されていますので、ネットで「奈良県 奈の良」と入力すれば、簡単に参照して、プリントアウトすることもできます。昨年度のガイドクラブで吉野川沿いを散策した時にも大いに活用させてもらいました。最新号の第 10 号「奈良市」では、「柳生街道」「清酒」「桜と撮影」「奈良・茶道」が紹介されています。日本語版とフランス語版を合わせて参照すれば、フランス語を勉強するための教材としても使えそうです。

2）**『Trésors Spirituels de NARA』**：奈良県が、今年の 1 月に発行したばかりの 24 頁からなるフランス語の小冊子です。ピエール・レニエさんご夫妻が、「修二会」「薪御能」「小川祭り」「春日若宮おん祭」について翻訳しています。奈良の伝統行事について知りたい、知識を深めたいという方にお勧めの一冊です。

≪2018 年度第 6 回理事会報告≫……事務局

☆日時：2019 年 1 月 10 日(木) 15:00～17：10。☆場所：放送大学奈良学習センターZ306 号室。
☆出席者：三野、ジャメ、野島、浅井、井田、高松、喜多、薗田、三木、杉谷、大内。
☆議題：1. 2018 年度会費納入額・会員数。　2. 11/15 理事会後の活動：秋の教養講座「服装で読み解くフランス文学」(11/23)、第 49 回日仏シネクラブ例会「アラン・ドロン特集④『山猫』」(11/25)。　3.今後の行事：来年度総会・懇親会(2/3)、第 50 回日仏シネクラブ例会「女優たちの輝き特集①『ルージュの手紙』」(2/24)、フランス語会話講座開講/講師：オリヴィエ・ジャメ。
4. 2019 年度役員候補案承認。　5.年次総会(2/3)開催に向けて審議。　6. Mon Nara。
7.その他：25 周年記念「フランス文化祭」、メーリングリスト。
☆次回 2019 年度第 1 回理事会：3 月 14 日（木）15：00～16：30　Z306 号室

編 集 後 記　☆昨年度ピエール・レニエ先生による「フランス語会話講座」に参加しました。私など最初は作文発表のような具合でしたが、秋も深まるとお互いに質疑応答が出来るようになりフランス語に少し近づくとともに、いろいろ興味深い経験や考え方を知ることができました。☆2/3 懇親会のスピーチの中でも紹介されましたように、ピエールさんは奥様と共に最近発行された《Trésors Spirituels de NARA》の仏訳をされました。日本文化、仏教に造詣が深いピエールさんならではのお仕事です。☆奈良の酒もお好きで昨年は「米からの酒造り」のイヴェントでもご一緒しました。唐招提寺と垂仁陵に挟まれた田んぼで籾撒き、田植え、稲刈り、脱穀と働いて、待望の純米吟醸酒がまもなく出来上がる予定であります☺ (R. Ouchi)

◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。
◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、ホットなフランス情報などを歓迎します。誌面の都合で意味を極力変えずに表現を変えさせていただくことがあります。次号は**5月 25 日**が原稿締切日です。

Mon Nara　2019 年 2 月号　numéro 289
奈良日仏協会　Association Franco-Japonaise de Nara
HP：http://www.afjn.jp　E-mail：nara.afj@gmail.com　FAX：0742-62-1741
〒630-8226 奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング菜宴[郵便物のみ] 発行責任者：三野博司